「漁場環境」 人間活動を大きく影響

底質や水質など調査

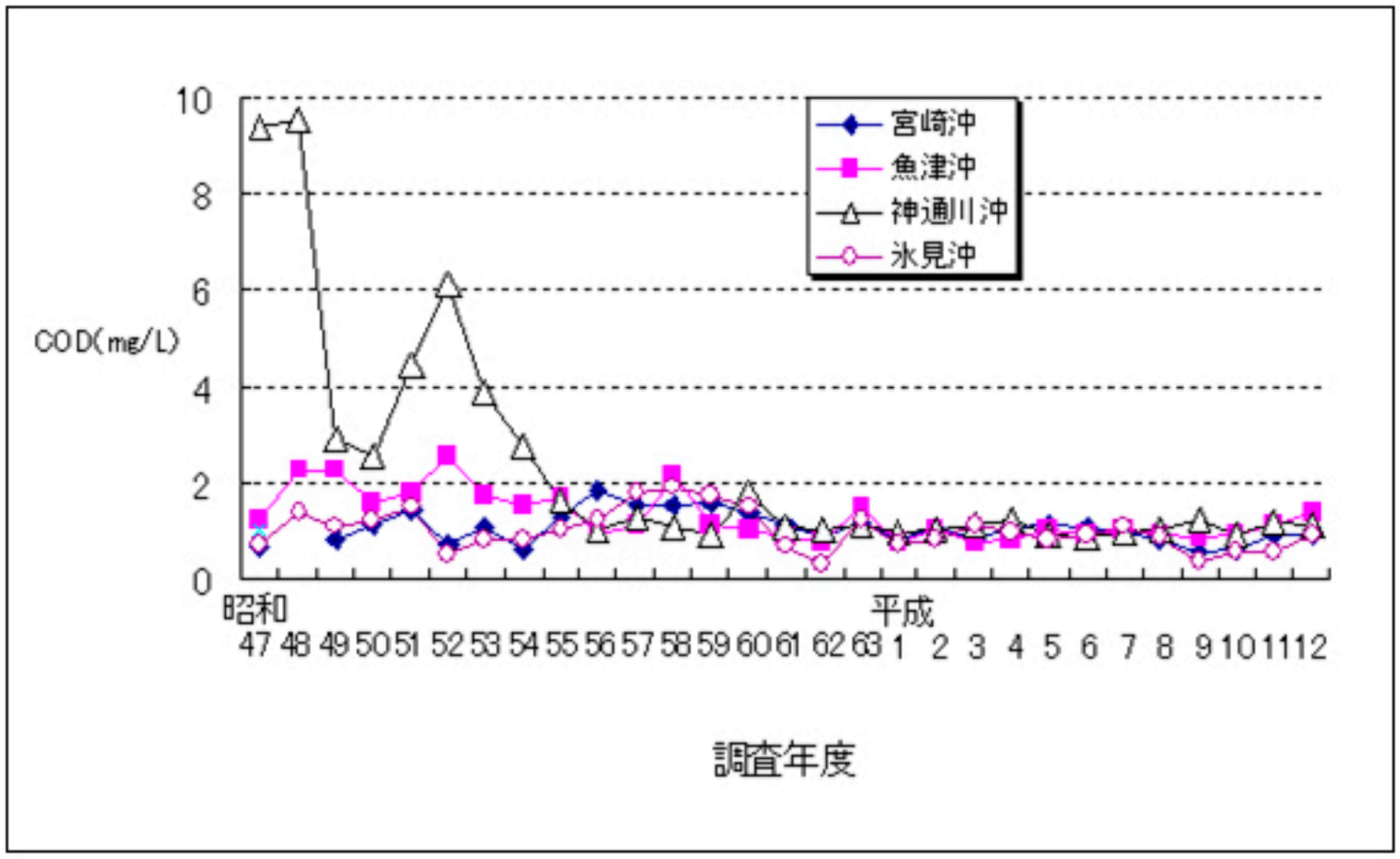
漁場環境と聞いて何を想像するだろうか？ 富山湾の場合、沿岸に大小100を超える定置網や、また多くの刺し網が設置されており、漁業の主要な場となっている。その環境の現状や変化を知ることは、漁業を考える上で重要なことである。

こうした観点から、県水産試験場では昭和40年代から現在まで、沿岸を中心に漁場環境調査を実施している。その内容は、水質に関するものと、海底の泥に関するもの(底質)がある。水質では水温、塩分、pH、COD(化学的酸素要求量、有機汚染の指標)など、底質では泥の粒度組成、COD、海底泥中に生息する生物(マクロベントスと呼ばれるもの)などを調査している。

本格的に調査の始まった、昭和47年以降の水質CODの変化を見てみると、昭和40年代後半から50年代前半にかけて、湾奥部では値が高く汚れていたことが分かる。この時期に汚濁の進んだ湾として知られるようになってしまった。

その後、水質汚濁防止法などの法規制が功を奏し、下水道の整備が進んだことや、工場からの有機物排出量が減少し、値が低下。平成に入ってからは低位安定している。このように一つの調査項目からでも漁場環境の変化が見えてくる。また、人間活動が川を通じて、海に与える影響がいかに大きいかということも如実に示している。

今後、神秘に満ちた富山湾のさらなる実態解明や、豊かな漁場として維持していくために、物理、化学、生物などあらゆる角度から富山湾をモニタリングしていくことが、より重要となってくる。 (小善圭一)



水質CODの歴年変化(昭和47年度～平成12年度)